

臨床医学における第1例を報告した先達

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹田, 亮祐 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/8467

臨床医学における第1例を報告した先達

The Great Alumni who described the First Case in Clinical Medicine

金沢大学医学部内科学第二講座
竹 田 亮 祐

十全医学会雑誌の内容は、ほとんど学位論文で占められており、病理、法医あるいは臨床分野における症例報告が掲載されることはなくなった。これは、あらゆる subspeciality 向きの専門誌が揃っている現今では当然の帰結というべきであろう。臨床家にとってケースレポートは、現実遭遇する疾患の病因、病態を知悉して患者に最善の治療を施すに際しテキストブックにはない貴重な情報を提供してくれる点で、大きな意義をもっている。医学は、伝承の学問である。稀有な症例について綿密な記載を遺しておくことは、類似の疾患を経験するであろう後輩に対する義務であり、エチケットなのである。しかしながら日常臨床において従前注目されていなかったことに疑問を抱き、新事実を発見したり、記載にない異常所見を発掘する機会は一般にきわめて少ない。初めてと思われる事例も大抵は過去の文献に網羅されていて先達の炯眼に感服することが多いのである。

わが医学部130年の歴史の中で、後年1つの新しい疾患単位として Takayasu's arteritis (高安動脈炎) の名を冠せられるに至った報告として、高安右人教授(眼科学)の「奇異なる網膜中心血管の変化の1例」1908¹⁾が光彩を放っている。わずか17行の抄録にすぎないが網膜血管の花環状吻合についての発表が大動脈炎症候群の1徴候についての最初の報告となった。本症の重要な今1つの“脈なし”の身体所見は、高安教授の報告に追加発言した大西氏の originality に属するが、わが国では国際的に通用する“高安動脈炎”の名称で統一する見解が示されている(厚生省特定疾患調査研究班)。

高安教授は抄録末尾に「此病氣、本体予ニハワカラズ」と述べられているがこの点は現在も変わりはない。

次に全く新しい疾患の記載とまではいかなくとも、いわゆる本邦第1例とされる発表も不断の文献渉猟と密度の高い診療の中から生まれる。本学で本邦第1例として記載された疾患として想起されるのは、岡島国彦氏(眼科, 1938)²⁾による Sjögren 症候群と、村田勇氏(外科, 1961)による Zollinger-Ellison 症候群の発表である。いずれもこれら先達が記載した当時の医学レベルと比べて、おびただしい新知見が加えられつつある特異な疾患である。ここでは Sjögren 症候群に関する知見の今昔に触れてみたい。周知の如く、“dry mouth”の記載は古く Hadden, WB の On “dry mouth” or suppression of the salivary and buccal secretions, 1888 にさかのぼるが、スウェーデンの眼科医 Henrik Sjögren が1930年に経験した第1例と、その後の同様症例19例(いずれも女

性患者)について詳細な臨床ならびに病理学的検討成績を発表した(1933)³⁾ため、彼の名が付けられた。この記載(Acta ophthalmol)の後、外国からも乏しい報告しかなかったが岡島氏は、中島実教授在職十周年記念学会(第62回金沢眼科集談会)において“乾性結膜角膜炎に(Ceratoconjunctivitis sicca)就て”と題し演述した。Sjögren の発表5年を経た1938年のことである。報告例は54才男性であった。女性優位の疾患としては珍しいが、大球性貧血、リンパ球増多を伴っており、一過性半身不随の既往歴をもつ点、他の自己免疫疾患を overlap していた可能性が推測される。当時の病因論によると、感染による Allergisch-anaphylaktisch の現象? 造血器系疾患? が述べられているが、最近ではどうであろうか。

一卵性双生児での本症の一致率は低いので、何らかの環境要因の関与が大きいものと考えられている。その最大の candidate は微生物感染、特にウイルス感染であるが、今後とも Koch の3原則を満たすようなものが発見される可能性は低いものと思われる。近年の研究成果によると、唾液腺導管上皮細胞上の class II 抗原により呈示された比較的限られた自己抗原を標的として CD4 陽性 T細胞が浸潤することが本症の中心となっていることが明らかとなってきた。従って今後研究のねらいはその自己抗原を探求する傾向になるものと予測される。ウイルスは自己抗原との共通抗原性や、自己抗原の変性などの機序を介して関与している可能性がある。自己抗原の候補の中でも SSB 抗原は、唾液腺導管上皮に潜伏感染する EBV など、種々のウイルスから転写された RNA と結合することが知られており興味深い。また、攻撃側のトップバッターである T細胞の異常についても注目され始めている。本邦第1例が記載された本学で病因が究明されていくことを期待したい。

1) 高安右人: 奇異なる網膜中心血管の変化の1例. 日本眼科学会雑誌, 12: 554 (1908).

2) Sjögren, H.: Zur Kenntnis der Keratoconjunctivitis sicca (Keratitis filiformis bei Hypofunktion der Tranendrüsen). Acta Ophthalmol. 11: 1 (1933).

3) 岡島国彦: 乾性網膜角膜炎に(Ceratoconjunctivitis sicca)就いて, 眼科臨床医報, 33: 1079 (1938).

(近年における研究動向は、教室の大学院研究科 野村英樹君の発表を参考とした)。